

中日新聞広告局の出身

三重エフエム放送社長に川島 博志氏

「苦しむ門には福来る」と意欲を披露



三重エフエム放送(*注1)の新しい社長に中日新聞社出身の川島博志さん(61)が就任した。新聞社では広告局一筋の営業パーソン。ネット時代に生き残りを模索するラジオ局はどこも厳しい経営状況で、畑違いのフィールドに立った川島さんは、培った営業力を生かしどんな新しい種をまいて育てるのか。「苦しむ門には福来る」と自作の信念を披露して難局に挑む。

(聞き手は塚本隆編集長)

「朝起きたらまずFM三重」という地域に

塚本 まずは抱負をお聞かせください。

川島社長 5月に中日新聞の大島宇一郎社長から「FM三重に行ってほしい」と内示を受けた時に、真っ先に頭に浮かんだのが、10年ほど前にZIP-FMの社長に就任されたばかりの稲葉功前社長の話でした。業界誌で「これからのFM局は収入が減る中でどうやって利益を出すか」と厳しい経営環境について話されていました。

私自身は、若い頃にはコピーバンドを組み、オリジナル曲でラジオにも出演したことがあったので、「ラジオ局の仕事なら楽しそう」と単純な感想を抱いたその一方で、稲葉さんの話からその経営となると大変だろうな、という思いでいっぱいになりました。

大島社長からは、「ラジオ局の広告は細かい広告主の集積。売り上げも小さな数字の積み重

ね。川島さんの持ち前のバイタリティで頑張ってください」と言われました。実際にいざ着任して営業の現状を聞くと5期連続の営業赤字。正直言って今は、さあどうやって行こうかと思案中です。それでも私の頭の中では、FM三重は「街のFM局」を目指すってことだと考えています。

リスナーにしても広告主にしても地域の方々が主人公のFM局です。「地域情報はFM三重で聴け」という風になって行ければと思っています。妄想かもしれませんが、三重県人は、朝起きたらテレビをつける前にラジオでFM三重を聴く、という習慣の地域だ、ということが目標です。

「災害に強いラジオ」を生かす

——三重の印象はどうですか？

川島 社員からは「三重県は各種データが全国23番目という県です」と教えられましたが、いろんなことが全国の真ん中ぐらいというデー